

## 航跡 35

# 米国医学部入学制度 (1)

木村 健 (アイオワ大学医学部外科)

9月はアメリカの大学では新年度の始まる月である。8月の終わりともなると、街では一目でそれとわかる新入生たちが、受講手続き、教科書の購入、アパートや下宿の引っ越しなどで右往左往する。医学部の新入生も例に漏れない。こうした手続きがようやく一段落すると9月はじめの「白衣着用式」を待つばかりとなる。

「白衣着用式」というのは、新学年の170名が一堂に会し、来賓や先達から医学生としての心得を聴かされたのち、壇上に呼び上げられて、医学部長から直々真新しい純白のジャケットに袖を通してもらう儀式である。毎年のことであるが、清々しく厳粛で気持ちの良い風景である。

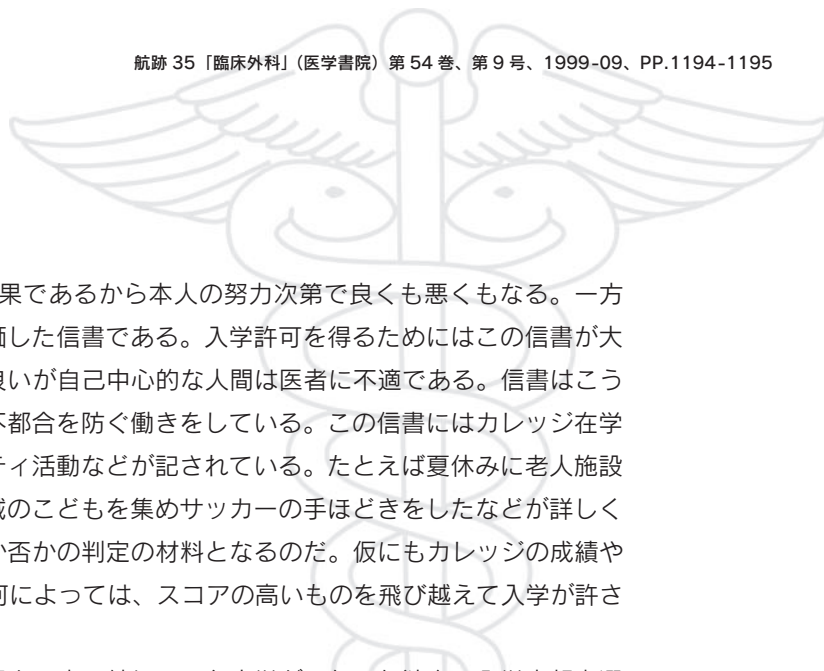
3年前から医学部入学希望者の面接試験を担当することになった。全米に126ある医学部は、すべて4年制のカレッジの卒業生のみが入学を許される大学院大学である。医学部のほかに法学部、歯学部が同様のポストグラデュエートと呼ぶ大学院制をとっている。高校卒業から数えると卒業までに8年かかるが、これにはわけがあるのだ。

アメリカでは高校からカレッジに入学する際に入学試験というものがない。進学志望者は各地で年に何度か行われているSATというテストを受ける。このテストのスコアと担当教師の推薦状、それに自分の将来展望を綴った作文を添えて各地の大学に提出する。SATを重視する大学では、高いスコアをとったものが有利である。他方、スコアよりも推薦状を重視する大学もあるから、適材適所に収まる仕組みになっている。カレッジに入ると2年間は、全員リベラルアートという教養学部で一般教養を学ぶ。その後各自選んだ専攻を終え4年で卒業する。

医学部に入るのはそれからである。医学部に入学する前のカレッジでの専攻は問われない。芸術学部を卒業後ダンスの教師をしていた者もあれば、経営学部を出てビジネスの一線で活躍していて急に医師になるのを思い立ったという者もある。志望者の半分位はいったん就職し社会人になったあと医学の道を選んだ確信型である。医学部入学のえり別けは、4年制の大学在学中の成績、学部長の推薦状、自薦の作文、およびMCAT (Medical College Administration Test) と呼ぶ医学部入学資格試験のスコアによって行われる。願書とこの4点を志望大学の医学部に提出し、あとは吉報を待つ。志望者の中には40も50もの大学に願書を出し、下手な鉄砲も数撃てば当たるといった可能性に賭ける者もいる。

アメリカのカレッジでは受講各科目の成績を4点満点で評価する。アイオワ大学医学部は平均が2.5以下の者の願書は受けつけない。入学者の平均点が3.6点であるから、カレッジを優等で卒業しなければアイオワ大学医学部入学は困難である。

MCATは、1. 文章理解能力、2. 物理、化学の基礎知識、3. 作文能力、4. 生物学、生化学の基礎知識の4項目の能力を問うテストで、その結果は何段階かに分かれたスコアで呈示される。各大学によってスコアの足切りレベルは異なるが、競争率の高い大学ほど高い。MCAT受験の当日、急病になったり、交通事故に巻き込まれたりして受験ができなくても絶望ではない。正当な理由があれば1~2週の内にも再試験をしてもらえる。たまたまの病気や事故のために若者に1年を棒に振らせることは、アメリカの寛容な国民性に合わない。



カレッジの成績や MCAT は数字に現れる結果であるから本人の努力次第で良くも悪くもなる。一方学部長の推薦状は志望者の人柄を主観的に評価した信書である。入学許可を得るためにはこの信書が大きく関与する。ガリ勉の点取り虫で、成績は良いが自己中心的な人間は医者に不適である。信書はこういう人間が医学部に入って医者になるという不都合を防ぐ働きをしている。この信書にはカレッジ在学中に行ったボランティア活動や地域コミュニティ活動などが記されている。たとえば夏休みに老人施設へ出向いて車椅子を押す仕事をしたのだ、地域の子どもを集めサッカーの手ほどきをしたなどが詳しく述べられている。他人のために献身する人間か否かの判定の材料となるのだ。仮にもカレッジの成績や MCAT のスコアが低くてもこの信書の内容如何によっては、スコアの高いものを飛び越えて入学が許される可能性がある。

全米の医学部は入学前年の 1 月 15 日に願書を一齐に締切る。各大学がそれぞれ独自の入学志望者選別システムを採っているため、志望者が自分で願書を用意すると、あまりの煩雑さに間違いが起こるものとなる。そこで登場するのが AMCAS (American Medical College Application Service) という願書の準備を専門にするサービス会社である。この会社は志望者と各医学部の間をとり持って、願書一式を取り揃え送付までしてくれるが、もちろんサービス料をとる。ちなみにその費用は基本料 10 万円位である。志望校が 1 校増すごとに料金は割増しとなる。医学部入学志望者はこの会社に、志望する大学のリストに成績証明書、MCAT スコア、推薦状、自薦作文を添えて前年の 11 月 1 日までに提出すれば、手続き一切をとり行ってくれる。MCAT も先に述べた SAT も実施するのは国公立の機関ではない。一企業によって実施されるところが自由の国アメリカならではの。AMCAS は志望者のデータをコンピュータに入れマッチする大学を検索してくれる。ここにも、受験した大学の競争率が高いというだけの理由で有望な若者が 1 年を棒に振る無益を省く思いやりがある。

これと比べると日本で行われている年に 1 回だけ、それも 2、3 日のテストで詰め込んだ知識の量のみを競い合うという医学部入試制度は医師にふさわしい人材を選ぶのに適しているか疑問である。高校生が医学部入学を希望する動機にはアメリカのカレッジ卒業生にみられる真摯さはないだろう。親や担任教師など外からの要素にあおられての決断がほとんどではないか。昨今、日本の若い医者をつぶさに観察すると、医者にナルだけのために医学部に入っただけで、医者をヤルことに興味があるのか疑わしい人間も含まれている。この現状を憂うなら、今の 6 年制を廃止し、アメリカで実施している 8 年制にすることを提唱する。4 年制のカレッジを卒業し、いったん職に就いていた人間が将来の進路に医者を選んで決めて遅くはない。高校生の夢とは判断の基盤が根本的に違う。クラブ活動もなければ、登校拒否も許されない医学部の学生生活にあるのは、良い医師になるのをゴールとした自己研鑽に邁進する毎日だけである。

今の日本の制度では、医学部にいったん入学してしまうと、自分でも、また他人からみても意志に適していないとわかったとき、進路を変えようがない。医学部中退者を雇ってくれるところなどありはしない。不本意ながら医師になるか、一度退学して他の学部に入り直すしかないのだ。こうした制約のために、いやいやながら医師になった卒業生も多数あると聞く。アメリカの制度では、当の本人が意思に適さないと気づいた時点で医学部を中退してもすでにカレッジを卒業しているから、やり直しの人生設計をたてやすい。医学部教職にあるものは社会に良い医師を提供すると同時に、医師不適格者を排除するという義務がある。医師になるべきでないと判断した若者に、進路変更を告げるのは辛い。しかし心を鬼にしてもそれを実行しなければ、教師の任務を果たすことはできない。昨今、日本では医学部は出たけれど医師国家試験をパスしないものが 5 人に 1 人いると仄聞する。国家試験の補習授業まで行われていると耳にすると、米国医学部との違いにただ驚くばかりである。